# 活彩!保健大学だより

AOMORI UNIVERSITY OF HEALTH AND WELFARE

第19号/平成20年12月25日発行　青森県立保健大学広報誌

現代ＧＰ フィールドワーク

ヒューマンケア学会

大学祭

就職合同説明会

## CONTENTS


現代ＧＰ…… 2
大学祭…… 4
サークル活動…… 6
高大連携事業…… 8
戦略的大学連携支援事業……10
十和田市との連携協力 ……11
就職関係……12
卒業生から……13
全国学会……14
大学院関係・博士論文中間発表会 ……15
特別講義……16
研究推進・知的財産センター活動報告 ……18
地域連携・国際センター活動報告 ……19
仁済大学校への派遣……20
AO 入試入学生の入学前教育 ……21
公開講座実施報告……21
保護者（後援会）懇談会 ……22
保健室つれづれ……22
出張講義及び大学見学状況／入試案内 ……23
大学見学・オフィスアワー／編集後記 ……24

# 現代ＧＰ(Good Practice) ―下北地域を元気にする参画型教育―
## 下北地域に密着した学習　―２０年度の活動報告―

副学長　上泉　和子

現代ＧＰは文部科学省の施策である大学教育改革の支援事業の一つで、社会的要請の強い政策課題に対応したテーマを設定し、応募された中から特に優れた教育プロジェクトを選定し財政的支援を行うことで大学教育の活性化を図ろうとするものです。

本学の取組は、大学が行う地域貢献事業と学生参画型実践教育とをリンクさせることで、下北地域の保健医療福祉の改善に資するとともに、地域貢献できる人材の育成をめざすものです。平成１７年４月からスタートした本事業ですが、早いもので今年が４年目の最後の年となりました。４年間のまとめはまた別の機会にして、ここでは平成２０年度の活動の一部と今後の取り組みについてご紹介します。

### １．下北地域における演習、実習

下北地域で行われた科目は昨年同様ですが、平成２０年度のカリキュラム改訂で、現代ＧＰの活動をふまえ下北で実施する科目の名称や内容の変更が一部行われました。また、２０年度から栄養学科がスタートしましたので４学科となり、理学療法学科、社会福祉学科の定員増もあって、１年生は５０人増え、２２０人になりました。そこでここでは、変更があった１年次科目の「健康科学概論」について特にご紹介したいと思います。

保健センターに全員集合

１年次科目のうち下北で演習を行うのは、「健康科学演習」という科目ですが、これは「保健福祉概論」が「健康科学概論」「健康科学演習」という二つの科目に分かれ、名称が変更になったものです。概論の講義では、健康の概念、生活者主体の保健福祉活動の基本理念や健康科学の基本的な考え方についてフィールドワークを通して学習し、他職種との「連携」づくりの基盤を学びます。そして、演習では学生全員が下北地域の風間浦村でフィールドワークを行いました。この演習では、健康科学概論で学んだことを実際に地域の人々の生活や健康の考え方にふれることによって、ダイナミックに理解し、他職種との「連

バスで下北に到着。寒かった！

保育園にて

携」の必要性や地区把握調査の基本的な方法について学習します。地区観察・地区視診、訪問インタビュー調査、現地講話などを学生主体に展開し、現地でのまとめと、学内でのまとめ、全体発表・報告会を行いました。

中学校に行って大学について説明しました

## 2．教員による研究・研修活動

佐井村磯谷・長後地区にて「介護予防元気塾」が、理学療法学科の川口徹准教授の指導のもと開催されました。体力測定から始まって、軽い体操や運動、訓練を通して、目標をもって健康ではりのある暮らしを送れるよう、皆で楽しく取り組んでいます。今年からはむつ市内に住む介護者をかかえる家族の人たちの集い「むつ介護者家族のつどい」がはじまり、２回開催されました。様々な苦労を話し合ったり、相談にのったり、本学教員による血圧測定も行われました。これからも続けていく予定です。ママのためのプチゼミは、すっかり定着した感があります。今年も精力的に開催されました。

発表

## 3．現地での活動支援

現地での活動を支える活動として、６月６日には、下北地域における教育研究活動に係る推進会議を開催しました。会議に引き続き、野中猛氏による「包括ケアを推進するための連携・協働」というテーマで講演会が開催されました。

## 4．これから

現代ＧＰ最後の年として、平成２１年２月４日にまとめとしての記念講演、評価会を開催します。

現代ＧＰは今年で終了しますが、本学が下北地域住民の方々の健康を支援する取り組みは継続されることになりました。下北地域で展開する演習や実習など、これまでとは形態は変わると思いますが、これからも保健大学と下北地域との連携を強めていきたいと思っています。

また、下北地域センターは移転しますが、むつ市内に引き続きおく予定です。今後ともセンターをご活用ください。

介護者の家族の方達の血圧測定を行いました

# 第10回大学祭を振り返って

大学祭実行委員長（理学療法学科３年）熊野　晶子

## はじめに

第１０回青森県立保健大学大学祭は１０月１１日（土）、１２日（日）に開催されました。

今年のテーマは『young ☆ わっしょ～い !!』でした。地域の皆様に、私たちの若さ溢れるパワーや勢いを伝えたいという思いから、このテーマを考えました。大学祭に参加した全ての学生、地域の方々が楽しめるような大学祭を目標に、夏休み前から準備を進めてまいりました。そして、大学祭当日は二日間とも天候に恵まれ、全日程をほぼ予定通り行うことができました。

大学祭で行った大学祭実行委員会による企画を以下に紹介します。

●オープニングセレモニー
●近隣幼稚園・保育園の園児による絵画展示
●オープンキャンパスアゲイン
●縁日　●安生園との交流会
●スタンプラリー　●中夜祭
●後夜祭　●花火打ち上げ

この他にも、バンド演奏や作品展示などのサークル企画や模擬店、教員・学生による展示・発表も行われました。また、外部企画としては日本原燃によるエネルギーコーナー、６つの施設による展示即売会、青森県牛乳普及協会による骨密度検査、青森モータースクールによる無料適正検査が行われました。

そして広報活動では、企業への連絡や協賛金の依頼を行い、昨年と同様、約３０の企業から協賛して頂くことができました。ポスターやパンフレットも、私たちのパワーや勢いが伝わってくる、とても素晴らしいものができたと思います。

栄養学科 展示説明

## 大学祭を振り返って

今年度の大学祭を振り返ってみると、大きな事故や怪我人が出ることもなく、無事に二日間の日程を終えることができ、本当に良かったと思います。今年は昨年よりもさらに模擬店の出店数も多くなり、また中夜祭への出場者も例年より多かった気がします。学生の「自分たちで大学祭を盛り上げよう！」という気持ちが伝わってくるようで、とても嬉しかったです。また、実行委員会としては、今年度の大学祭では数年ぶりに花火打ち上げを企画したりと、新しい企画を用意することもでき、良かったです。

しかし、大学祭当日は、準備不足のために色々な場面で、学生の皆さんをはじめとして多くの方々にご迷惑をおかけしてしまいました。この場をお借りして、もう一度お詫び申し上げたいと思います。

園児の絵画展示

## 今、思うこと

私が、大学祭実行委員長になったきっかけは、実は一回勝負の「ジャンケン」でした。実行委員長という仕事は大きな責任がかかるし、大変そうだし…など、多くの理由から実行委員長という仕事は絶対にやりたくないと思っていました。ですが、実行委員長を決める運命のジャンケンの時、私はチョキを出し…見事に負けてしまいました…。

ジャンケンに負け、実行委員長になった瞬間の私の頭の中はというと、リーダーシップのない私がどうして実行委員長をやらなきゃダメなのか、という妙な怒りが込み上げてきて、その後は、頭の中が真っ白になっていました。その後しばらくは、逃げられない重圧と大きな責任を感じて、頭を抱える毎日でした。ですが、時間が経つうちに、大学祭を楽しみにしている方々の存在に気付き、大学祭を成功させなければいけない、という使命感が生まれてきました。絶対に大学祭を成功させ

よう！と、ジワジワと私の負けず嫌い精神に火がつき始め、私の実行委員長としての活動がスタートしました。

しかし、実行委員会の組織当初は、どう活動して良いのかわからず、試行錯誤の日々でした。というのも、私をはじめとし、実行委員メンバーのほとんどが、初めて委員になった人たちばかりだったからです。そのため、昨年の実行委員長をはじめ、多くの方々にアドバイスやご指導を受けながら、大学祭準備を進めていきました。

そして、あっという間に夏休みが明け、大学祭当日を迎えました。およそ半年かけて準備を進めてきた大学祭は、気づけばあっという間に終わっていました。最初は苦痛に感じていた実行委員長という仕事ですが、いざ、大学祭が終わってしまうと、とても寂しい気持ちです。放課後、実行委員メンバーで集まり準備を進めていたあの毎日が、とても楽しく充実したものだったことを、最近になって感じています。

今、思うこと…実行委員長になれて本当に良かったです。あの時、ジャンケンで負けたことは本当にラッキーだったと思います。実行委員長という仕事を通して、人の上に立つことの責任や苦悩、重圧を感じ、また、だからこそ感じることができる達成感や感動があることを知りました。そして何よりも、最高の実行委員に出会えたことを幸せに思います。実行委員になっていなければ、一度も話すことなく卒業していただろうと思われる人たちとも、仲良くなることができました。悩んだときは互いに支え合い、楽しい時には一緒に笑いあえる、そんな最高の仲間に出会えた私は、本当に幸せ者だと思います。

大学祭の最後の企画「花火打ち上げ」では、花火が打ち上げられた瞬間に、自然と涙がこぼれました。周りを見ると、私だけでなく、他の実行委員のメンバーも涙していました。こうやって無事に大学祭を終えることができたのは、皆さんが夏休みやその他の貴重な時間を割いて、寝る間も惜しんで活動してくれたおかげだと思います。皆さんが居なかったら、私は実行委員長という立場から逃げ出していたでしょう。本当に皆さんに支えられっぱなしでした。こんなに頼りない委員長に、最後までついてきてくれて、ありがとう。くじやジャンケンで負けて、実行委員になった人が多かったようですが、最後まで投げ出さずに準備を進めてくれたこと、本当に感謝しています。みんなが居てくれて、良かったよ。本当に、本当に、心からありがとう。

また、学祭に関わり、力を貸していただいたリボウィッツ学長をはじめ教職員の方々、様々な方面でお世話になった学外の方々など、すべての方々に深く感謝申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

そして、大学祭に参加してくださった学生の皆さん、大学祭を一緒に盛り上げてくださり、ありがとうございました。来年は、今年以上の学祭にするため、さらに盛り上がっていきましょうね。

青空の下での手話コーラス

## おわりに

私たち実行委員は、大学祭に参加した全ての方々が「わっしょ～い♪」な気持ちになり、楽しめるような大学祭を目指してきました。皆さん、いかがだったでしょうか？楽しむことはできましたか？一人でも多くの方の心の中に、今年の大学祭が楽しい思い出として残ったならば、私たちはとても幸せです。

それでは、最後になりますが、もう一度、今年度の大学祭に関わってくださった全ての方々に、心から感謝の気持ちを込めて、いつもの、いってみますか！皆さんご一緒に…両手を上に伸ばしてのジャンプ、お願いしますね。

せぇのっ！…ヤングゥ～☆わっしょ～～～い !!!!

本当にありがとうございました！

大学祭実行委員会のメンバー

## バレーボール好きの仲間達

（顧問 / 鈴木　孝夫 教授）
看護学科2年 吉川　直希

私達バレーボールサークルは、バレー経験者・未経験者関係無く、バレーボール好きが集まり様々な活動をしているサークルです。主な活動は毎週月曜・金曜日に体育館でバレーボールの試合を行い、汗を流しリフレッシュすることですが、その中で他学年・他学科の仲間との交流を深めることができる場でもあります。それは、学校生活を送る上での勉強や人間関係の形成等において、各々にとって非常に良い機会となっています。

試合も厳しいものではないので、毎回皆気楽に参加しています。勉強やその他疲労が溜まったとき、とても良い息抜きにもなります。メンバー同士仲が良いので、とても明るい雰囲気で楽しく試合を行っています。また、他の団体との練習試合も行い、交流の輪も広げていくと共に、チームワークや個々の技術の向上も図っていきます。

試合の他に、大学祭では模擬店を出店し、メンバー同士の絆をより強くしたり、頻繁に飲み会や様々な遊びを催したりと活動は充実しています。今後も皆が楽しめるような、様々なイベントを少しでも多く行っていく予定です。

バレーボールサークルでの活動を通して、授業では学ぶことができないものを見つけ、後に各々が大切な思い出だと感じることができるサークルにしていくために、これからも積極的に活動していこうと思います。

バレーサークルメンバー！！

## 水泳サークル

（顧問 / 桜木　康広 講師）
理学療法学科3年 高橋　芳佳

水泳サークルは、「水泳を通じて、心身ともに鍛え、交流を深めよう」を目的として活動しています。水に顔をつけるのが怖い、ダイエットのために泳ぎたいという方から本格的に大会に出たいという方まで幅広く在籍しています。創設３年目で、まだ活動の基盤が固まっておらず、手探り状態で活動を行っています。

現在は、「青森県立保健大学水泳部」として日本水泳連盟関東支部に籍を置き、私を含めて２名が加盟登録しています。私個人としては、３年連続で日本学生選手権、全国国公立大学選手権に出場し、また青森県の代表として昨年は秋田国体、今年は大分国体に出場しました。３年間水泳を続ける中で、故障による挫折を味わい、勉学との両立に不安を感じたこともありましたが、友人、先生、家族といった多くの人の理解と支えがあり、最後まであきらめずに続けることができ、本当に感謝しています。今後もこの保健大学から一人でも多くの大会参加者が生まれることを期待しています。

水泳は個人競技に分類されますが、水泳サークルという一つの団体として、サークル内の交流をより一層深めていきたいと考えています。身近にプールがないため、活動頻度としては、あまり多くはできないかもしれませんが、地域との関わりを深めつつ、水泳の楽しさを多くの人に伝えていけたらと考えています。サークル活動以外にも学祭への模擬店出店や新入生歓迎会など催し物もあります。今後も機会がある限りさまざまな企画を考えていきたいと思うので興味のある方はぜひ一度足を運んでみて下さい。

国体出場

## 津軽三味線サークル

（顧問 / 藤井　博英 教授）
看護学科2年 **奥寺　貴大**

津軽三味線サークルは、毎週金曜日にサークル室や音楽室に集まって活動しています。演奏会や大学祭が近づくと、放課後や授業の合間の空き時間を利用して、メンバー達が練習に励んでいます。

演奏会は、秋に行われる大学祭や学会で行われる懇親会の余興として行っており、学外では老人福祉施設や障害者施設の慰問など、学内外問わず活動しています。また、春に市内で行われた「津軽三味線日本一決定戦」に出場し、秋には「The・津軽三味線」というイベントなどに参加するなど、活動範囲を広げています。

サークルのメンバーは、その殆どがサークルに入ってから三味線を始めたという人ばかりですが、外部からお呼びしているプロの先生や先輩方の手ほどきを受けて、三味線の腕も徐々にではありますが確実に伸ばしてきています。また、個性豊かなメンバーがそろっているので、いつも笑顔が絶えません。そんな中での活動だからこそ、お互いに刺激し合いながら腕を磨いていくのでしょうね。そして何より、メンバー一人ひとりが三味線を愛していますから！

まだまだ未熟な私たちではありますが、これからもどんどん練習を重ねて、様々な場所に出向いて演奏活動を行い、三味線の輪を広げていきたいと思っています。もし、「三味線に興味があるな」と思った方がいたならば、是非津軽三味線サークルにいらしてください。サークルメンバー一同、歓迎します。一緒に津軽三味線を楽しく演奏しましょう！

高校生の大学見学時の演奏風景

## フォトサークル

（顧問 / 勘林　秀行 准教授）
社会福祉学科3年 **羽賀　愛美**

私たちフォトサークルは、毎週・何曜日に活動するというような、これといった定期的な活動は行なっていません。基本的には各自が撮りたい時に写真を撮るという、自由な形でやっています。

フォトサークルなので、暗室で写真の現像を行うこともあります。これだけ言うとすごいと思われるかもしれません。しかし、実際はサークルのメンバーは９割が初心者で、フィルム・写真現像の経験がないため、失敗や試行錯誤をかなりしています。そんな中で、作業を楽しんでいるというのが本当のところです。

そんな私たちも、大学祭前後は活発に動きます。まず、夏休みに１～３年生のサークルメンバーで集まり、市内で撮影会を行ないます。今年は合浦公園で撮影会を行ないました。その時の写真を中心に、自然や動物など、それぞれの個性で選んだ様々な写真を大学祭期間に展示し、たくさんの方に見ていただいています。また、大学祭期間中は、出店している模擬店やサークル発表・演奏の写真を撮影し、大学祭終了後に掲示・販売もしています。大学祭の思い出として、こちらもたくさんの学生に買っていただいています。また、今年は第１回サークル対抗運動会の写真撮影など、学校行事の撮影にも関わっています。

少しずつ活動の場が広がっている私たちですが、これからも学校の素敵な思い出を残せるような写真を撮っていきたいと思っています。

フォトサークルメンバーです。

## 高大連携事業について

学生部長 **藤井　博英**

朝日新聞の記事データベースで検索すると、「高大連携」という語をふくむ記事は、110件ヒット（2006年3月1日現在）し、初出の記事は、2000年であり、1件の記事がヒットするにすぎません。高大連携を取り上げた記事が急増するのは2002年以降のことであります。本大学は、平成2005年より保健大学と青森東高校との高大連携が開始されています。

この事業は、大学における授業を体験することで、生徒さんが、より具体的に本学についてのイメージを持っていただくものです。また、高校とは異なった講義を聴講することで、いろいろな学問への興味や関心を深めてもらうことを趣旨としています。

受講生は2年次生42名（男子5名、女子37名）でした。生徒の授業科目は、「グローバル社会と文化」「医療人類学」「理学療法原論」「社会福祉学概論」の4講座です。生徒達は4月から7月にかけて、およそ週一回のペースで大学に通い、大学生と机を並べて受講いたしました。

2008年8月26日、「高大連携」事業の修了式が行われ、全員が修了しました。リボウィッツよし子学長が、各講座の代表の生徒に修了証書を手渡し、「おめでとうございます。生涯にわたって学ぶ気持ちを持ち続けてください」と祝福しました。

本年度は、4講座での受講でしたが、生徒さん達の要望等取入れながら、様々な学問の存在を知り、視野を広げ、学問の深さを知り、勉学への取り組みに高い目標を持つことができるよう、次年度以降も充実した運営を行いたいと考えております。

## 高大連携事業；高校と大学での学びの違い

看護学科教授 **大関　信子**

高校生を迎え「医療人類学」と「グローバル社会と文化」の科目を担当させていただいている。講義の初めに、大学は学問の場であること、学問とは何かを教授している。

学問には2つの解釈がある。まずは、新しい知（knowledge）の創造である。知の創造には、毎日の生活や医療現場で「これは何か」「なぜだろう」という疑問を持つsensitivity(感受性)が必要である。そして、疑問を解明するための研究の作法（方法）を習得し、忍耐強く実施していく力が要求される。創造された結果が普遍的真理であると認められるならば、それは新しい「知：knowledge」となる。

これらの「知」を学生に伝授するのが教育であり、テキストや本にはこの「知」が集約されている。学生は既成の「知」を学ぶのである。この学ぶ行為を学問ともいう。高校での学びは、大学での「知」の創造の土台となる。なぜならば、知の創造にはたくさんの情報が必要だからである。

人はなぜ「学問」をするのか。それは、よりよく生きるためである。創造された「知」は、人々が幸せに生きるために活用されて初めて生きてくる。また、たくさん知っている、ということはよりよく生きていくために必要なことである。

学生の責務はたくさん本を読み、よく考え、よりよく生きる術を身につけることである。高校生は、学問の土台となるあらゆる教科を学び、大学生は知の創造の作法を習得し卒業論文で大学の学びの集大成をする。学生というこの恵まれた短い時間を最大限有効に活用してもらいたい。

修了式での「参加生代表のことば」を終えて

## 理学療法原論；高大連携授業を終えて

理学療法学科講師 **盛田　寛明**

理学療法学科の「理学療法原論」では、今年度、11名の青森東高校生に参加していただいた。この授業では、理学療法の全体像や理学療法士としての資質など基本的な内容を学ぶことを目的とした。毎回の授業では、疾患別あるいは職域別の理学療法の場面を紹介するDVD教材を活用したことで、障害を持つ方々とその生活環境について理解を深めるとともに、チーム医療における理学療法士の役割を目にすることができ、高校生にとっては新鮮な体験だったであろう。毎回の小テストやレポート、さらにはグループ研究が課され、少々きつかったかもしれないが、大部分の受講生は大学生に負けず劣らず頑張っていた。グループ研究とレポートは特に苦労したと思う。大学生と力を合わせて、自分で言いたいことを決め、資料をさがして読み、整理して考え、発表して原稿を書くという過

程を経る必要があった。この、自分で疑問を追求し、問題解決する意識をもつことがこの授業の目標の一つでもあった。受講者は、本学の図書館や学内LANデータベースを自由に利用することにより、大学生活を疑似体験することができたであろう。今回の体験が、今後の進路選択や高校での学習の指針になることを期待している。

高校生諸君は、今までともすれば周りからやることを与えられてそれをこなすことが多かったかもしれない。閉じた本は紙のかたまりに過ぎぬ、という格言がある。これから皆さんがいろいろなことに取り組むときには、外から与えられる目標ではなく、自分でなすべきことを探求し、自分をそれに向かわせなければいけない場面にたくさん遭遇すると思う。その際、この授業で学んだことを少しでも役立てて欲しいと願っている。

## 「高大連携」
### －通年授業の半期解放から前期完結授業解放へ－

社会福祉学科准教授 **増山　道康**

高大連携の社会福祉概論は昨年まで、通年科目の前期のみ受講であった。上半期で一応完結するようにシラバス上の工夫はしていたが、半期だけで社会福祉のあらましの一応を理解することは、高校生にとって容易ではなかったと思われる。また、社会福祉学科1年生にとっても中途半端な授業展開となっていて満足度が、やや低くなっていたと思われる。

今年度は、栄養学科が開設され、そこに前期のみの科目として社会福祉学概論がおかれた。そこで、こちらを高大連携授業として開放することにした。前期完結であるため、やや駆け足で社会福祉と社会保障のあらましを授業することにはなったが、必ずしも社会福祉に十分な興味を持つとはいえない管理栄養士養成課程の学生が受講するため、導入教育的な授業展開を行った。児童・障害・高齢という社会福祉の各分野と地域・家族・施設という領域、及び社会保障の中心的な制度である年金・医療・介護といった社会保険並びに公的扶助等をかいつまんで解説することで、社会福祉の制度理解を進めた。また、ソーシャルワークや専門職倫理についても一定の理解が可能なような授業を展開できた。

結果的に、高校生も興味を持って授業に参加ができたと思われる。しかしながら、管理栄養士過程の標準授業内容に即してシラバスを作成し、それに沿って授業を行ったため、毎回の授業のつながりが十分では無かった点は来年度に向けた反省点である。導入教育的な授業を高大連携で開講した効果と不十分な点を吟味し来年度につなげていきたい。

## 高大連携科目における指導過程と学習形態

栄養学科准教授 **浅田　豊**

本年度、人間総合科学科目２年次配当の「グローバル社会と文化」では、青森東高校から計１２名の生徒の参加を得た。授業内容及び指導過程は高校生向けにアレンジし直したものではなく、普段大学生を対象に実施している水準のまま受講してもらっている。指導過程上は、学生・生徒一人ひとりが学習すべき諸課題を自主的に発見し、主体的学習を経てそれらを解決することに重きを置いている。よって教員が提供する講義を経て、授業の中盤ではグループワークや学習成果に関わるプレゼンテーションの場面を積極的に取り入れるとともに、終盤には質疑応答並びに総括・まとめの時間を含めた。

講義では、「地球市民社会を構築する上での諸課題～異文化理解と多文化共生の視点から～」、「開発途上国における社会開発問題～子どもたちの生活環境分析：人口増加の視点から～」、「グローバル時代の新しい価値の創造～感育の提唱～」といったテーマについて講じ、「開発と文化」に関し幅広い知識を獲得し、また考察を深化させられるよう支援をした。また、できる限り学習者個人や各グループの学習傾向を把握し、それぞれに適した討議・意見交換が一層進展するように工夫・配慮を施した。高校生たちは初めこそ若干緊張していたようだが、学習形態としてのグループワーク等にも次第に慣れ、自信を持って堂々と発表等にも参加していた。

進路意識の高揚や知的好奇心の涵養、教養並びに専門的知識の習得、大学・高校側双方の教育内容の充実、学生・生徒の資質の向上等の意義を有する高大連携事業がさらに充実・発展するよう、担当教員の一人として今後もＦＤの推進等に努めたいと考える。

修了式における学長からのあいさつ

## 1　戦略的大学連携支援事業について

「戦略的大学連携支援事業」は、国公私立大学間の積極的な連携を推進し、各大学における教育研究資源を有効活用することにより、当該地域の知の拠点として、教育研究水準のさらなる高度化、個性・特色の明確化、大学運営基盤の強化等を図ることを目的として、平成２０年度から文部科学省が新規に開始した事業である。

## 2　採択の経緯

平成２０年２月、青森地域大学間連携協定が発足し、同協定の協議会により大学コンソーシアム青森を運営することとしている。この目的を達成するため、青森県立保健大学が代表校、青森市内の全大学が連携校となり、戦略的大学連携支援事業の公募に応じ事業申請したところ、平成２０年8月19日付けで採択の通知を受けたものである。

本事業には全国から計９４件の申請があり、内５４件が採択されている。

## 3　事業名称

「現代の北のまほろば!! 青森に根づく「知の循環型社会」の形成」

## 4　代表校及び連携校

代表校名：青森県立保健大学

連携校名：青森公立大学、青森大学、青森短期大学、青森中央学院大学、青森中央短期大学、青森明の星短期大学（６校）

## 5　事業の目的

青森市内の全大学が連携して地域型大学の教育・研究基盤を充実させ、地域社会と大学の連携による「知の循環型社会」の構築を進め、活力ある文化的な街づくり、楽しい地域コミュニティづくりを支援する。

## 6　事業の内容

大学コンソーシアムセンターを市内中心部に設置し、これを拠点として、教育、研究、地域貢献に資する次の事業を行う。

**１）教育の連携**

①　教養教育等での連携

単位互換制度、合同講義システム、教員免許状更新講習会

②　大学院教育での連携

大学院教育研究の相互交流

③　学生の交流

大学共通カード（ASCa パスカード：Aomori Student Card）の発行により、各大学施設の相互利用、他大学の授業の履修手続き、施設利用時の受付処理の電子化

**２）研究の連携**

①　知的財産マネジメントの合理化

コンソーシアムセンターに知的財産管理プロパーを置き、知的財産の発掘と管理運営、事務的管理の合理化を図る。

②　各大学研究シーズの連携発展

医療福祉、経済・経営、社会学分野の研究者間での協同研究、外部資金導入に関するプロジェクトチーム化等の促進

**３）　地域との連携**

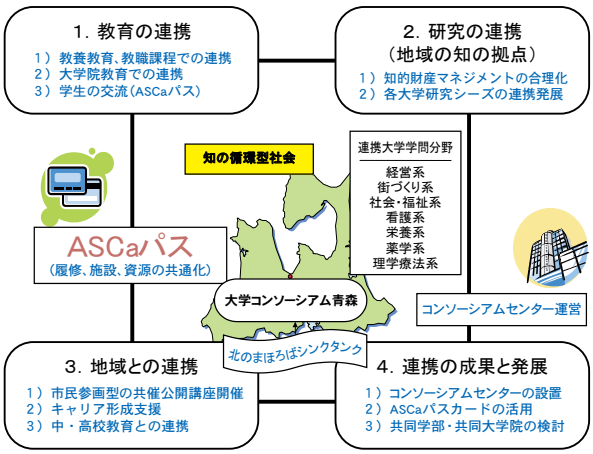
①　キャリア形成支援

住民に対して、就業、起業、ボランティア活動、社会活動等に関するキャリア形成支援のための相談窓口を設置する。

②　地域シーズ発掘型公開講座

各大学連携及び市民講師発掘による共催公開講座の開催、「北のまほろばシンクタンク」を設置し「北のまほろば講座」を開講

**連携取り組みの内容**




## 7　事業期間

平成２０年度～２２年度（３ヶ年）

## 8　事 業 費

平成２０年度　３８、５００千円

## 十和田市との連携協定について

地域連携推進課長 石川　順一

平成２０年８月２８日、十和田市役所において、十和田市と本学との連携協定に関する協定について、中野渡春雄市長とリボウィッツよし子理事長との間で、関係者が見守る中、調印式が行われました。

この連携に至る経緯として、十和田市がＷＨＯの提唱するセーフコミュニティを目指す上で、本学の支援が必要とされることから、本年６月にリボウィッツよし子理事長に提案がなされました。

この背景として、平成１７年度から本学の教員を含む関係者による日本におけるセーフコミュニティ推進の研究の場として十和田市がモデル地域として推進されてきました。

平成１９年４月に中野渡市長がセーフコミュニティ推進を正式に表明し、本学教員も外部委員として委嘱されたほか、ＷＨＯセーフコミュニティの認証取得要件である事故外傷調査を実施するにあたり、アンケートの作成・調査・分析に協力してきました。

また、これらと併せて、十和田市立中央病院との保健医療及び地域福祉分野における人的資源の交流・活用を図るために本学との連携・協力が欠かせないことから、相互の理解のもと、包括的な連携のもと、保健医療及び福祉等の分野において相互に協力し、地域社会の発展と人材の育成に寄与することを目的として、協定の締結に合意したものです。

**【協力の内容】**

１　セーフコミュニティの推進に向けた連携に関すること

①ＷＨＯセーフコミュニティの認証取得を目指し、事故に関する世帯調査・分析評価を継続的に連携・協力により実施する。

②世帯調査に基づいて事故予防原因を分析し、予防プログラムを作成しアクションプランに反映させる。

③国内はもとより国際的なセーフコミュニティネットワークの形成のための人的（翻訳・通訳）による連携。

２　十和田市立中央病院との保健・医療・看護における連携

学生の実習の受け入れ・研修等の充実により、保健医療分野の連携を図る。

３　地域福祉の向上に向けた連携

地域包括ケアの推進をはじめとし、地域福祉計画の策定・推進の連携・協力を実施する。

４　その他地域活性化に向けて両者が協議して必要と認める事柄

十和田市長と

協定締結調印式後の記念撮影

## 就職対策について

就職対策委員会

就職活動支援は、全学的な就職対策委員会のもとに各学科で就職対策チームを編成し、学科の特性に即した就職指導、面接、小論文対策を実施しています。

また、就職合同説明会、就職ガイダンスを開催し、情報提供・交換・把握を行っています。学生が自己の能力を最も発揮できる職場、職域に就くことができることを第一に支援しています。さらに、学生の就職希望調査や就職ガイダンスの実施、就職対策マニュアルの作成、就職情報室の整備、公務員試験対策など計画的な取り組みを行っています。具体的には、

### １）学科別就職ガイダンスの開催

各学科の特性に即した就職指導を行うため、２年生後期、３年前・後期と４年前期に学科別に実施しています。就職指導カウンセラーを外部講師として招き、面接カード（エントリーシート）の記載方法や実際に面接指導をして頂いています。

### ２）就職合同説明会の開催

学生（３・４年生）が、病院や社会福祉施設の人事担当者と直接面談して情報交換をする場であり、高い就職率の維持、県内定着率の向上などを目指して毎年７月に開催しています。学生は多くの病院・施設の担当者から直接情報を得、より自分に合った就職先の開拓の場となっています。

### ３）面接試験対策

各学科の卒業研究担当教員、学科内就職対策チームが中心となり、面接や筆記試験等に落ち着いて冷静に臨めるように、模擬面接、小論文添削など、学生一人ひとりに個別の指導を行っています。また、外部講師を招いて集団面接の仕方についての研修会を開催しています。

これら就職対策を通じて、２００７年度卒業者の就職率（２００８．４．１８現在）は、合計で９６．３％であり就職環境が厳しい中、高いものでした。内訳は、看護学科１００％、理学療法学科８４．２％、社会福祉学科９２．３％で、県内出身者１１３名のうち県内就職者は６２名（５４．９％）でした。

今後、本学でも県内就職を高める方策を具体的に検討するとともに、卒後生の活用等の工夫が必要であると考えています。

就職ガイダンス

面接研修会

MESSAGE FROM GRADUATES

## 保健師３年目になって

中山　満美子
（看護学科４期生）

保健師になって、気がつけば２年半の時が経っていました。

私は今、母子保健業務をしています。最初の頃は、小さい子どもへの接し方が分からなく育児相談も自信がなく、様々な問題を抱えるケースに対して、自分に何ができるのか…保健師の役割は何だろうか、など悩んでいました。３年目を迎えた今、業務にも慣れてきましたが、複雑な問題を抱えるケースに対して未だに悩む日々を送っています。

しかし、やりがいは大きいです。特に母子保健は、赤ちゃんが誕生した時期から関わることができ、その子が育ってゆく環境に大きく影響します。その子が大きくなっても子どもを産み育てるためには、その子自身の育った環境の影響が大きく、継続した支援が大事なのだと、実感しています。

ケースにとって何が良いのか？どうすれば良いのか？など考えながら、つまづくことも多いですが、先輩達に支えられ、またケースの笑顔に励まされ業務をしています。

まだまだ未熟な保健師ですが、その人らしく元気に生活できるような支援ができるよう頑張っていきたいです。中学生への思春期教育も面白く、保健師の業務にはいっぱい魅力がありますので、ぜひ皆さんも保健師を目指してみて下さい。

MESSAGE FROM GRADUATES

## 就職して思ったこと…

斉藤　優子
（理学療法学科６期生）

私はいま、理学療法士として市内の老健で働いています。午前はデイケアの利用者様を、午後は当苑に入所されている方々のリハビリをそれぞれ担当させて頂いているのですが、臨床実習で病院のリハビリしか経験してこなかった私にとって、老健のリハビリはまさに未知の世界でした。働き始めてからしばらくは、病院との違いを理解するまでに時間がかかってしまい、毎日がただ驚きと戸惑いの連続となっていました。また、自分の提供している理学療法が、ご本人にとって本当に満足して頂ける内容なのか悩んでしまう事もあったのですが、『それが利用者様にどのような影響を与えていて、どう変化しているのかをよく観察し考える』という、当たり前でありながら重要なことを改めて意識する事で、不安な気持ちを乗り越えていけるようになりました。今後も先輩方からの助言を頂きながら、知識をより深め、常に最良のものを模索していきたいと思っています。

春に働き始めてから、早くも半年が経ちました。まだ分からないことばかりですが、「利用者様の生活をより良くしていくために、自分にできることは何か」を意識しながら、これからも一人ひとりと真剣に向き合っていきたいです。

MESSAGE FROM GRADUATES

## 現場で働いてみて

角田　陽子
（社会福祉学科６期生）

気が付けば就職してから半年が経ちました。現在私は認知症対応型グループホームの介護員として働いています。私は元々高齢者介護をしたいという思いと、相談職に就く前に現場の実情を知っておきたいという考えから、介護の現場に就職しました。

実際に現場で働いてみて、ＢＰＳＤ（認知症によって起こる行動上の症状と心理学的な症状）への対応の難しさを改めて痛感しました。利用者の性格や生活歴等が深く関わっていて、うまく対応できないこともあります。要介護度が重くなればなるほどその利用者に対する介助が多くなります。しかし要介護度の軽い利用者からみればその光景が面白くないということも多々あります。時には、この仕事が向いてないのではないかと悩むこともあります。そんな時に支えてくれるのはやはり利用者や職場の先輩、先生、友人です。利用者からお手紙を頂いたり、「あんた来るの待ってるんだ。」という言葉に大変元気付けられています。また、技術や知識の未熟な私は、先輩への相談、アドバイスにより、少しずつ職場に慣れることが出来ました。大学の先生や友人へ相談すると、どのように対応すれば良かったのか一緒に考えてくれ、毎回助けられています。

色々と大変なことも多いですが、利用者と共に笑い楽しい日々を過ごしています。これからも利用者が笑顔でいられるように、頑張っていきたいと思っています。

## 第１回日本ヒューマンケア科学学会学術集会開催
# メインテーマ：ヒューマンケアを科学する

第1回日本ヒューマンケア科学学会学術集会
会長 リボウィッツ　よし子

日本ヒューマンケア科学学会は、２００７年１０月に発会し、２００８年３月に創刊号の発刊、そして八甲田山の紅葉がはじまる中で、第１回の学術集会を開催できました。近年、生活に関する物質は豊になり、人々は長寿になる一方、人々の生活は、孤立化が進み命を軽んじる事件が多発しています。本学会の趣旨は「人々が相互に理解しあいよいコミュニケーションをもって助け合いながら、健康に生活できるための科学」をすることです。そのためには、広く研究者・教育者・実践者・消費者が集い、交流し、学問として構築を図ることをねらいとして第１回学術集会のプログラムが組まれました。

会長講演のテーマは、「ヒューマンケアを科学する」です。それは、近年の技術革新における作り手側から見た新しい技術開発のアイディアと、受けて側のニーズのなかで、顕著にギャップがみられるのは他でもない医療・生命科学の分野であると指摘されていますが、複雑な「人のケア」は、近代科学で全て実証されない要素が多分にあります。その中で、「ケアの科学」が注目され始めた大きな要因として、近年の疾病構造の変化が、感染症から慢性疾患と老年退行疾患に移行し、「ケア」のニーズがますます高くなってきている事実があげられます。「ケア」の要素である「人と人との関係性」、「繋がり」が喪失・崩壊している現代社会にあって、「医療としてのサイエンス」が「ケアとしての医療」へと反転を余技なくされる局面が浸透しつつあります。（例．少子超高齢化社会、終末期ケア、慢性疾患）そこで、近代科学の進歩で忘れ去られた多面性・深層性を持つ複雑な人間の「ケアの科学」を、最近科学者の間で解明され始めた「情動・感情」の働きが、「ケアと脳の仕組み」と深く結びついていることを例にあげ、各々の縦割りの学問分野のみでなく、文理の壁を越えて様々な立場や学問分野を代表する知の最前線を結集し、「共通知」をひらいてゆくことが社会に求められています。

基調講演は、国立保健医療科学院施設科学長の筧淳夫先生をお迎えし、少し異なった角度の「ケアをとりまく施設環境」の観点から、世界中の病院・施設の人の使用する「椅子」について大変興味深い講演をいただきました。病院・施設のみでなく今後ますます増加してゆく在宅ケア・ロングターム施設への示唆が得られました。

公開市民シンポジアムは、“本当に求められるヒューマンケア”というテーマで開催され、田崎博一先生からは、「被害者支援の見地」、臨床心理士の関谷澄子先生からは、「女性相談所からの見地」、そして中村由美子先生からは、「家族看護の見地」について、今求められているヒューマンケアについて課題提供がなされ、活発な意見交換を行いました。

ヒューマンケア科学学会は、正会員８３名【２００８．９．２６現在】の誕生したばかりの学会です。今後この学会が職種間を超え、多くの分野の皆様と交流し、共に育み、更なる発展を期待しております。

研究成果の掲示閲覧の様子

## 大学院関係博士論文中間発表会からトライする喜び

研究科科長 松江　一

青森県立保健大学は平成１１年４月の開学以来、平成１５年４月には大学院修士課程、平成１８年４月に博士課程を開設し、学部から大学院まで一貫した研究教育を展開できる高等教育機関となった。平成２０年３月には本学で初の５名の博士が誕生、それに加えてこれまで８４名の修士を輩出した。現在、これらの学位取得者は県内のみならず、全国で「科学的根拠に基づいたアートオブサイエンスを武器に、ヒューマンケアの実践者」として中核的役割を果たしている。

ここでは研究科開設当時から、修士および博士の中間発表会や公開発表会を通して感じたことを二～三述べたい。大学院生（以下院生とよぶ）は、職場の最前線で働く社会人が多く、時間的制約から必ずしも恵まれていないが、そのような環境にもめげず、困難な研究テーマに果敢にトライしていることに衷心から敬意を表したい。

大学院研究科（大学院とよぶ）に入学後、君たちは研究に必要な技術的な能力のブラッシュアップと、自己の専門分野を深く掘り下げ、そこに横たわる問題点や取り組むべき課題を整理し、研究テーマを設定し、それを達成するための目標と計画をたてトライした。しかし、計画と現実に進める困難さに多くの院生は直面、実際のところはその連続だったに違いないと察する。それでも、指導教官の助言や大学院同期の頑張りに励まされ、その悩みを解決しながら目標に向かって少しずつ前進していく、見方を変えると、目標を定めそれに向かってトライ＆エラーしながら進むこれが研究生活なのかも知れない。

そしてトライすることで多くのことを学んだり、新たな展開が開かれたに違いない、それは講義で教えられるものではなく、トライして初めて自己の研究テーマや職業の重要性を再認識したり、あるいは、トライすることでその彼方に潜んでいた新たな事柄を発見したり、トライが新たなトライになったり、トライすることで漠然とあった不安が解消され自信や希望が現実のものとなり、同じ境遇下でトライをする仲間とこれまでとは違う連帯感が生まれているようにも感じた。小生の分野には「千三つの世界」という言葉があるが、「何か新しいことに挑戦する君たちは千回トライして３回成功すれば恵まれていると感じるべき」という格言があり、これがまさに研究の世界と言える。それだけに君たちが、２年又は３年かけて見いだした「エトバスノイエス」（= etwas neues=something new）」新たな発見は、少しであっても大切にすべきであろう。それが君たちの独自性（=identity）や明日への一歩に繋がるからだ。

大学院では、今年度から修士および博士論文の中間発表会と公開発表会に関して幾つかの試みをしたので、その意図するところについて述べたい。1つは院生論文発表会への院生の全員参加を義務化したこと、そして積極的に質問することを奨励した。この心は、後輩は先輩の研究発表を良く聞いて「吸収できるところは吸収する」「同じ間違いは2度と繰り返さない」「来年は私もあのように発表しなくては」など、「研究に対する気構えや心構えを明確にする」や「研究はまず真似ることから始めよ」である。

二つ目には発表者は難しい質問や簡単な質問に、「常に他の人の疑問や質問に、一面的な見方でなく、常に視点を変えたという立場からものを考え、感性を養い研ぎすますこと」、また、質問に的確な解答することで「デスカッションが上手くなること」や「的確な説明責任を養う」というものである。質問は自分が知るためと、発表者の研究がより良くなる建設的な質問があり、短く的確に内容を捉える良い訓練となるからです。

三つ目には博士の中間発表会で試みたことですが、会の座長や進行を、講評や注意事項を除いてすべて、院生に任せたことである。これは博士課程の人に対しては、自分が進めている研究は「まとめてどんどん学会で発表し、その学会の雰囲気に慣れて欲しい」という意図があった。

これらを積み重ねて行くことが「青森県立保健大学大学院の良き伝統」になるものと確信している。

最後に小生が尊敬してやまない江上不二夫先生の言葉を添えて、君たちの研究意欲を刺激したい。「大学院生が本気になって２年(江上先生は半年）研究すれば、その分野のそのテーマの世界の最先端にいつの間にか君はいる」それだけ若いひとが熱中すれば、道は必ず開ける。

自由な環境下で、自由闊達なデスカッション、お互い切磋琢磨しながら、そこから自分なりの思考回路、独創性や創造性を構築していく、その結果が、少しでも世の人のためになるかあるいは学術の進歩に寄与するならば、このうえもない喜びである。そして君たちはいつしか我々のライバルとなりそれを乗り越えて、立派な教育研究指導者として育って行く、その出発点が大学院かもしれない。

## 中間発表会を終えて

博士前期課程 森田　要

平成２０年１０月、校内の木々の紅葉が、秋晴れの空に美しく映る中、博士前期課程の研究活動を報告する「中間発表会」が開催されました。

１年時の講義において、大学院修士課程は研究の初心者であり、研究者としての能力を備えること、そして、研究のスタートラインに立ったことを学び、研究への意欲を持ったことを鮮明に記憶しています。

研究活動は初めての経験が多く、いろいろな迷いが生じ、壁にぶつかったり、溝にはまったりしながらも、日々の積み重ねが研究を形作ってきたことを、今、実感しています。この日に至るまでには、御指導いただいた先生方や、お互いの研究について議論した仲間、そして、発表の練習に立ち会い、意見してくれた後輩たちがいました。

そしていよいよ本番当日。私は、緊張感に包まれながらも、自身の研究について、全力で発表しました。発表が終わると、諸先生方の専門的な視点からの御助言をいただくことができました。このことは、自身の研究の曖昧だった部分が明らかになり、今後の研究の方向性について客観的に見つめ直し修正するための、貴重な時間となりました。御指導、御助言をいただいた先生方、そして応援してくれた院生の仲間たちに深く感謝いたします。ありがとうございました。

# 今、精神科の医療現場では！―ＰＳＷに期待される役割―

講師 石田　康正 氏

社会福祉学科では、社団法人青森精神医学研究所附属浅虫温泉病院の理事長であり、青森県精神保健福祉士協会会長も務める石田康正氏を講師に迎え、10月15日（水）、「今　精神科の医療現場では！―ＰＳＷに期待される役割―」と題して特別講義を開催した。

石田氏が理事長を務める浅虫温泉病院は、昭和１３年に創立された、青森県で最も古い歴史を持つ精神科病院である。今回の特別講義では、自身の実践経験を踏まえながら、ＰＳＷ（精神保健福祉士）に求められる役割や力量について語っていただいた。

講義の冒頭では浅虫温泉病院の歴史に触れ、戦前、戦後の精神科病院での実践についてお話された。有用な薬や治療法が確立されていない中で、浅虫温泉という地域の特性を活かしながら、どのような実践を行ってきたのかといった興味深いお話をいただいた。

石田氏はＰＳＷにとって一番大事なこととして「自分らしさ」をあげ、自分らしさを上手に出して、自分にしかできないケースワークをし、クライエントとしっかり向き合うことが重要であると語った。

また、ワーカーは粘着剤のようなものであり、コーディネートをすることが一番の仕事であると述べられた。コーディネートをするためには、見る人によって視点が変わることや、ライフステージや立場によって役割が様々に変化することを理解している必要があるということを、事例を挙げながら説明していただいた。更に、相手の話を聞くということの重要性を強調し、話を聞く際は、その中の真実はどれか、自分が思っていることはどれか、相手が思っていることはどれかを分けて考えるということが大切であると指摘した。相手の話した言葉だけでなく、表情やしぐさ、関係者の話など、様々なことを組合せながら正確な情報を積み上げ、コーディネートしていくことが求められる。話を聞くことは普段から訓練することができると述べ、自分の頭のフィルターを通さずに、入ってきた言葉を素直に聞くこと、一度否定してしまうとその後の話を聞くことができなくなってしまうため、その人の話を大事に聞くことが大切であると話された。

石田氏は、精神保健福祉士が１９９７年に国家資格とされたことによって、ワーカーになりたいという人が増加している一方、資格化される以前のように、あれこれ試行錯誤しながら様々なことをやってみようという意欲が低下しているように感じられると指摘された。また、社会の変化によって時の流れが速くなってきており、それに伴って社会に適応できない人が増加したり、病気の症状、病院や医療も変化し続けている。そういった変化の中で、ワーカーはしっかりとクライエントの方向を向き、上下関係ではなく、同じ目線の高さで支援していくことが重要であるとお話された。

今回の特別講義では、石田氏が実際に学生への実習指導の際に気をつけていることなどを交えてお話いただき、質疑応答も活発に行われた。学生にとって実習の際の心構えや、対人援助をする際の姿勢についても考える良い機会になったものと思われる。

（文責：社会福祉学科長　大和田　猛）

石田氏のご講演の様子

# 健康的な食生活を実現する第一歩は？

栄養学科長 吉池　信男

## 「食事のバランス」は難しい？

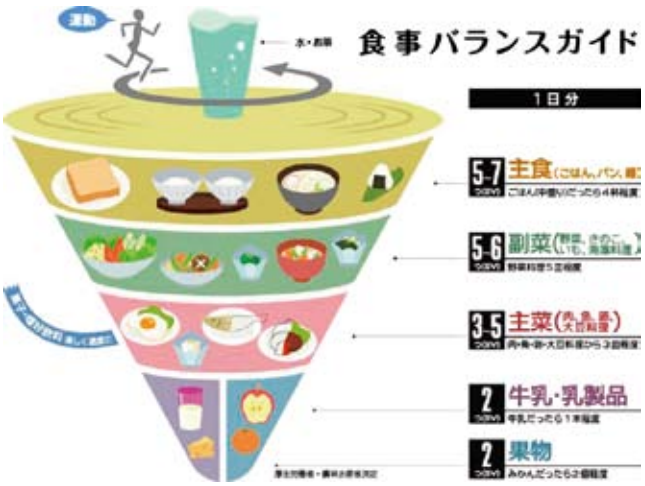
専門家の間でも、また日常的な会話の中でも「食事はバランス良く！」としばしば言われます。

しかし、その「バランス」を実際のものとするのはそれほど簡単なことではありません。その理由として、エネルギーや各種栄養素、あるいは各食品（群）について、健康の保持や疾病予防という観点から、至適な量を示す科学的根拠は意外に少ないということがあります。そして、それぞれの栄養素についての至適な摂取量が科学的にわかったとしても、具体的な食事として一人一人が理解し、実行しようとするためには、目の前の食べものと栄養素〇 mg との間をつなぐ、“現実的な物差し”が必要となります。さらに、何をどれだけ食べるかということに加えて、１日の生活の中で、いつどのように食べるかということも、「バランス」という意味からたいへん重要なことです。

## 生活リズムの見直しと「食事イメージ」の共有から

昨今、「食育」が“ブーム”とも言える状況にあり、「食」にかかわる様々な関心が高まる一方で、まったく無関心な層などでは、“食事らしい食事”をしていない人たち（親と子）も少なくないと言われています。いろいろな場所、また各種の施策や事業の中で、朝食をきちんととることを推奨する取組が行われていますが、栄養素云々という以前のこととして、（大きくずれてしまった）生活リズムを整えるためにも、「朝ごはん」はわかりやすく、とても大切な第一歩と考えられます。

従来の栄養指導では、個々の栄養素や食品（群）について、アセスメントや食事計画をつくることが重視されています。このような“分析的”なアプローチは、専門家にとっては数値の拠り所がはっきりしており、やりやすいようですが、その指導を受ける人たちにとっては敷居の高いものとなります。特に、食生活について関心の薄い人たちや食生活が大きく乱れている人たちに対しては、より身近な言葉や数字、またイメージとして示すことが必要と考えられます。そのような目的から生まれた「食事バランスガイド」は、１日にとることが奨められる「食事イメージ」をイラストと簡単な数字（＝上述の“現実的な物差し”）で示したものです。細かい数字よりも、まずはおおらかに考え、「食事イメージ」の共有から始めることが、問題解決につながるのではないかと考えています。



# 平成２０年度研究推進・知的財産センター活動報告
## ― 文部科学省科学研究費内定率３０.２％ ―

研究推進・知的財産センター長 藤田　修三

この年４月、センターの名称変更とともに着任しました。これまでスタッフの努力でセンターの構造改革を行っていただき、機動性のあるセンターに生まれ変わりましたが、ここでは新しくなったセンター活動の一端を皆様にご紹介いたします。センターの設置目的ですが、研究の推進に対する助成、設備の支援、また優れた研究成果の知的財産化にありますが、先ず本年度から７つの委員会（研究推進・知的財産センター運営委員会、特別研究等審査会、研究開発科委員会、研究倫理委員会、動物実験委員会、知的財産委員会、共同・受託研究受入審査委員会）が組織されることになりました。

研究の推進・支援活動面では、大学の研究力アップ、また外部資金導入策として、これまでの「健康科学特別研究」助成制度が文部科学省科学研究費補助金の内定に結びつくように支援しています。本年度は同補助金内定率は３０.２％と、全国７００以上ある大学のなかで第１８位と誇れるものとなりました。これはひとえに教員の攻めの研究活動成果の賜物です。

知的財産関連では、平成２０年度から知的財産権の創出・保護・活用体制の構築のため、各ポリシーの整備や研修会等を開催し、知的財産に関する教員への啓発を図っています。また経済産業省所管の(独)工業所有権情報・研修館より派遣いただいている大学知的財産アドバイザーに協力いただき保健大学系では数少ない研究シーズ調査活動を行っています。この事業を推進しながら、知的財産の創出や活用、また産官学連携や共同研究の促進を図っているところです。

また大学として知的財産に係る「新規性の喪失等に対する例外救済措置」を受けるため、平成２０年９月１１日、特許法第３０条に基づく学術団体の指定を受けました。これは本学が主催する学術集会、シンポジウム、卒論発表会等において知的財産にかかる発表をした場合、６ヶ月間、公的にその権利が保護されるという制度です。

このように研究推進・知的財産センターでは、研究の支援、契約を重んじる合理的社会での知的財産の運用支援活動をすすめています。

**平成20年度科学研究費補助金の大学等別の採択率（上位30校）**

○平成20年度（新規採択分）における採択率・採択件数

| | 機関名 | 採択率（%） | 採択件数 |
|---|---|---|---|
| 1 | 一橋大学 | 48.6 | 35 |
| 2 | 東京外国語大学 | 45.9 | 34 |
| 3 | 愛知県がんセンター（研究所） | 43.1 | 25 |
| 4 | 国立情報学研究所 | 39.7 | 23 |
| 5 | 福井県立大学 | 37.3 | 19 |
| 6 | 分子科学研究所 | 36.5 | 23 |
| 7 | 生理学研究所 | 36.4 | 40 |
| 8 | 中央大学 | 34.5 | 39 |
| 9 | 京都大学 | 34.1 | 875 |
| 9 | 国立遺伝学研究所 | 34.1 | 28 |
| 11 | 東京大学 | 33.9 | 1,019 |
| 12 | 同志社大学 | 31.8 | 64 |
| 13 | 慶應義塾大学 | 31.5 | 259 |
| 13 | 独立行政法人国立環境研究所 | 31.5 | 17 |
| 15 | 北陸先端科学技術大学院大学 | 31.2 | 39 |
| 15 | 岩手県立大学 | 31.2 | 24 |
| 17 | 名古屋大学 | 30.9 | 530 |
| 18 | 基礎生物学研究所 | 30.6 | 19 |
| 19 | 青森県立保健大学 | 30.2 | 13 |
| 20 | 九州歯科大学 | 29.9 | 23 |
| 21 | 奈良先端科学技術大学院大学 | 29.8 | 72 |
| 22 | 甲南大学 | 29.3 | 17 |
| 23 | (財)東京都医学研究機構 | 29.1 | 52 |
| 23 | 上越教育大学 | 29.1 | 16 |
| 25 | 東京学芸大学 | 29.0 | 31 |
| 25 | 独立行政法人情報通信研究機構 | 29.0 | 27 |
| 27 | 関西学院大学 | 28.9 | 35 |
| 28 | 大阪大学 | 28.7 | 712 |
| 28 | 早稲田大学 | 28.7 | 193 |
| 30 | 青山学院大学 | 28.6 | 34 |
| 30 | (財)癌研究会 | 28.6 | 26 |

注1）研究代表者の所属する大学等により整理している。
注2）応募件数が50件以上の大学等を分析対象としている。（採択率＝採択件数/応募件数）

※本学（応募件数43件、新規採択件数13件）
採択率　13　/　43＝30.2%

# 地域に開かれた大学を目指して

地域連携・国際センター長 石鍋　圭子

本年４月の独立法人化に併せ、健康科学教育センターを改組し、地域連携・国際センターと名称を変えて再スタートしました。

当センターの目標は、大学が有する教育機能を活用して、地域社会との緊密な連携を推進することにより、地域の保健医療福祉分野の人材育成、生涯学習機会の提供その他地域貢献活動を行うとともに、海外教育研究機関との組織的連携を図り、学際的交流を推進することです。これまでの教育センター機能を引継ぎ、大学の地域貢献活動を一括把握して情報発信するとともに、今まで以上に地域のニーズに合った活動を推進したいと考えています。また、大学が一方的に発信するのでなく、地域の皆様がいろいろな形で本学事業に参画していただけるようにしたいと考えています。

こうした趣旨に添って、地域連携の窓口として地域連携推進課がＣ棟１階事務室に新装開店しました。ここには、事務職員とセンター専任教員ならびに専門職教育課程の専任教員が詰めています。年々研修事業が増え、毎日２～３教室で何かの講義がある状況です。

センターの各種事業は運営会議を核として、地域連携科地域貢献部会、研修科委員会、国際科委員会、専門職教育課程別運営会議等が企画・運営を担当しています。しかし、実際の運営は、講師や実行係を依頼するなど学内外の先生方の協力を得て可能となっています。上半期終了時点での活動内容を知っていただき、センター事業へのより一層のご理解とご協力がいただけましたら幸いです。

**○地域連携科（科長はセンター長が兼務）**

地域連携の拠点として新しく設置されました。各科に属さない事業や新規開発事業を担当しています。また、専任教員が主となり、センター年報やホームページ、パンフレットの編集を行っています。目玉は、昨年度からの継続で文科省の助成事業、「医療安全にかかわる看護技術学び直しプログラム“静脈注射”」の実施と「がん化学療法認定看護師教育課程」の次年度開講に向けて教育機関申請をしたことです。

・地域貢献部会（杉山克己部会長）

従前の地域貢献委員会の事業を引継ぎ、公開講座を中心に大学の地域開放を推進する観点から検討を進めています。公開講座は、新設栄養学科の紹介と県のがん対策推進を側面から支援するテーマで開催しました。また、“ケア付きねぶた”へのボランティア参加を積極的に後援しました。１０月には、呼びかけに応じてくださった住民の皆様と座談会をもち、本学への期待や活動についてご意見をいただきました。 今後は、“地域住民による本学サポーター制度”など、大学と住民との連携を具体化するための取り組みを提案していく予定です。

**○研修科（佐藤恵子科長）**

研修科委員会は、教員による研修、教育改善、ブックレット作成の公募型助成事業を実施しています。後期は、“ケアマネジメント in 青森”等の研修会や、新規事業として卒業生対象の研修を予定しています。組織としての変化は、看護職教育課程である「救急看護認定看護師」と、「認定看護管理者（サードレベル・セカンドレベルの隔年開講）」、および県の委託事業「社会福祉研修」が研修科長の所掌事項となったことです。

**○国際科（深谷智恵子科長）**

国際科委員会は、地域交流と学際交流を２本柱に継続的な活動を展開しています。前期には、理学療法学科と仁濟大学との交流支援を実施し、青年海外協力協会キャラバン隊の表敬訪問を受けました。また、海外からのお客様が多くなるのに備え、大学グッズの制作に向けて学生・教職員のアイディアを公募しました。さらに、２年前より検討している、フィリピンセブ島マンダウェ市での学生研修の可能性について、千葉委員が現地に赴き、アジア近隣諸国との国際交流を推進する観点から、情報収集を進めています。

ケア付きねぶた：ボランティア事業を今年はセンターが後援しました

## 充実した異文化体験

理学療法学科3年 柳谷　智海

私達が韓国に滞在した２週間は周りの方たちの手助けもあり、大変充実したものでした。滞在した期間のうち、１週目は仁済大学の付属病院である白病院で実習をさせていただき、韓国における理学療法と日本における理学療法の共通する点・異なる点を実際に見ることが出来ました。理学療法の基本となるものは同じであるため、手技などにおいて大きな差をみる事はあまりありませんでしたが、保険制度の違いや文化の違いなどによる「違い」を見かける機会がとても多かったです。滞在２週目は仁済大学の学生と一緒に理学療法学科の授業を受ける機会を与えていただきました。私達が３年生ということもあり、初めて耳にする授業ではありませんでしたが、私達が日本で受ける授業とは学生達の意気込みが異なり、とても新鮮なものでした。また、この他にも滞在期間中の休日や実習・授業終了後の自由時間には現地の学生が様々な韓国料理を食べに連れ出してくれたり、景勝地などの観光に連れて行ってくれ、学生生活や食事などといった生活に密着した点でも異文化を実際に目で見て体験することができました。

これらの貴重な体験をしたうえで、韓国語が全くといっていいほど話せない私達には英語が欠かせない「ツール」となりました。実習をさせていただいた白病院はもちろん、授業や学生たちともコミュニケーションすべてにおいて英語は重要な架け橋となってくれました。しかし、英語が完璧ではないためジェスチャーや表情で表現することが多々あり、つたないながらも伝えようとする気持ち、そして相手の言いたいことをなんとかしてわかろうとする気持ちの重要さに改めて気づかされたきっかけとなりました。

見送りに来てくれた学生達と

## 韓国での貴重な体験

理学療法学科3年 後藤　悠人

私は、今年の８月に韓国仁済大学校との国際交流のため、２週間韓国へ行ってきました。始めに、私たちは5日間の病院実習を行いました。韓国の病院は基本的には日本ととても似ていましたが、理学療法をとっても日本と異なる点も多くありとても興味深かったです。病院では実際に患者に対して理学療法を行う手伝いをさせていただくことができ、とても良い経験ができました。理学療法士の方々もとても気さくで親切な人ばかりで、リハビリルームの雰囲気はとてもアットホームで、患者にいつも親切に接する先生方の姿はとても勉強になりました。そんな気さくな先生方との実習は毎日楽しく、貴重な実習を過ごすことができました。

放課後や休日は、韓国の友だちとみんなで韓国料理を食べたり、韓国のプロ野球を観に行ったり、お酒を飲んだりととても充実した生活を送ることができました。最も印象に残っていることは、仁済大学の理学療法学科の生徒約１２０名が集まってくれた送迎会です。その日は朝までたくさんの友だちと、たくさんのチャミスルを飲みながら、理学療法のことについてや、野球・サッカーでは韓国と日本どっちが強いかなど熱く語り合うことができました。そのパーティーの最後に、韓国人の友達が言ってくれた『We are friend!! Never forget!!』という言葉がとてもうれしく印象に残っています。私たちは、韓国で私たちと同じように理学療法を勉強するたくさんの友達と出会い、そして私の人生においてとても貴重な時間を過ごすことができました。これは私にとって一生の宝物です。この出会い、経験を今後の自分の成長に繋げていきたいと思います。

パク病院のスタッフと

## ＡＯ入試入学前教育『共通課題』の実施状況

栄養学科 准教授 浅田　豊

時間をかけた丁寧な選抜過程を経て、ＡＯ入試の難関を突破し早い段階で合格が定まった入学予定者へのきめ細かいサポートは、各大学にとって重要な課題といえる。それは受験生の能力・適性や目的意識、学部・各学科のアドミッション・ポリシーとの一致性等の観点から総合的かつ多角的な判断を行なう一方で、その後の学習意欲・態度の持続・向上や動機付けの促進、基礎学力のさらなる確立、大学での専門的な授業内容に関する興味・関心の喚起などへの対応は不可欠であるからである。本学での入学前教育は、各学科の専門の立場からの指導・支援と各学科に共通するプログラムとに大別される。前者では英文和訳・要約作成・感想や意見の記述・それらに対するアドバイスやコメントの送付等の内容を含み、後者では課題文の講読や小論文・レポートの作成、個別添削指導結果のフィードバックといったプロセスを経るものである。

このうち筆者が担当した共通課題では、テーマとしては「社会経済システムと教育」に関するもの、「地球環境問題」を取り扱ったもの計２題に定め、出題方法に、一定の条件のもとでの要約や各自の実体験に基づく自分自身の考えの導出・論述を含めた。レポート提出に関わる入学予定者への案内は１２月上旬、その後約１ヶ月間の学習期間を経てレポートの提出期限は１月の中旬、そして入学予定者個々人へのアドバイス等の返送は２月上旬にそれぞれ行なわれた。共通課題の添削に際しては「出題意図を考え、資料を踏まえた自分なりの考えやその根拠を適切にまとめることができたか」、「論理的一貫性をもって全体を構成できているか」、「具体的で独創的な意見が含まれているか」等の観点・基準を重視した指導・助言を個別に行なったが、筆者が担当した３学科の計１３名の入学予定者たちは皆非常に熱心に、レポートを作成していた。今回のような入学前教育の機会が学生の入学後の主体的学習能力や問題解決能力、根拠に基づく科学的な思考の向上等につながれば幸いなことである。入学前教育が今後も充実・体系化されていくことを期待するものである。

## 公開講座実施報告

地域貢献委員会

本学では、県民の生涯学習や知識の向上を支援するため、一般の県民を対象とした「公開講座」（基本テーマ「生活と健康」）を毎年開催しています。平成２０年度は「がん予防」「初めまして栄養学科です」を年度テーマとして計６回開催しました。

**第１回目　５月３１日（本学大講堂）**
- ○「ちょっと“メタボ”になってきたら…～気軽にできる食事と運動の工夫～」（栄養学科　吉池信男教授）
- ○「がん予防の視点」（青森県立中央病院　吉田茂昭院長）

**第２回目　６月１４日（本学大講堂）**
- ○「大学生の生活習慣と健康－喫煙による血流障害・血圧上昇・免疫異常の検討－」（理学療法学科　渡部一郎教授）

**第３回目　６月２８日（むつ市下北文化会館）**
- ○「生活習慣改善によるがん予防」（看護学科　千葉敦子講師）
- ○「血液さらさらと健康」（栄養学科　井澤弘美講師）

**第４回目　７月１２日（本学大講堂）**
- ○「正しい食生活から美しい皮膚を、美しい皮膚から全身の健康を」（栄養学科　今淳教授）
- ○「緩和ケアとは」（青森県立中央病院　秋庭聖子主任看護師）

**第５回目　７月２６日（本学大講堂）**
- ○「より良いがん医療を受けるために」（看護学科　鳴井ひろみ准教授）
- ○「ピンピンコロリ、元気で長生きするための食と栄養」（看護学科　岩井邦久教授）

**第６回目　１０月１１日（本学大講堂）**
- ○「家族の「がん」と付き合うための“より良いコミュニケーション”」（看護学科　中村由美子教授）

延べ合計数で１，７３７人の受講者があり、受講者の皆様からも好評を得ることができました。

公開講座

## 保護者（後援会）懇談会

学生委員会

保護者（後援会）懇談会は、学生の生活対策･支援の一環として、毎年１回、大学祭初日に開催しています。保護者（後援会）懇談会では、本学の教育方針、学生の修学状況、学生生活や就職サポート体制の説明、修学や就職に関する個別相談の時間を設け、本学をより身近な存在として捉えていただき、保護者の皆様から大学に関する率直なご意見・ご要望を傾聴し、今後の教育・学生支援充実の一助としています。さらに、教員と保護者、保護者同士の相互交流をはかる、ことを目的として運営しています。

平成２０年度保護者（後援会）懇談会は、平成２０年10月11日（土）１３：００から教育研究Ｃ棟３階Ｎ講義室２において開催され、４０名の保護者の皆さんにお越しいただきました。

リボウィッツ理事長が「法人化と新学科開設をさらなる飛躍のチャンスととらえ、他大学との資源の共有、地域貢献、コスト意識の形成などを職員一丸で進めたい」との挨拶があり、その後、学部長より本学の教育方針や現況を報告されました。

その後の個別面談の希望者は、看護学科９名、理学療法学科４名、社会福祉学科４名、栄養学科１名でした。その主な相談内容は、①青森県内の就職状況、②年間行事予定の閲覧の可能性、③保護者への成績表の送付のお願い、③保険の見直し等でありました。個別面談において保護者からは、成績や、就職に関する心配事などをお話し、「安心した」、「先生と話せて良かった」との評価をいただいております。しかし、「わが子の成績を教えてほしい」という保護者の要望が増えてきております。

一部の私大では慣例化していた父母らへの成績送付が、近年、早稲田大などの有名私大や国立大にも広がり、北海道大は今春入学の学生から通知を始めています。主な理由は、「成績を知ってもらうことで留年が防げる」「学資を出す人への説明責任がある」「学生のメンタルヘルス対策」（欠席や留年を経て心身に不調をきたす学生もいることから、履修状況や成績を父母らに伝え、危機意識の共有を図る）などですが、大学内部には「学生を子ども扱いしていいのか」との懐疑的な意見もあります。今後、本件については、大学と保護者が連絡を密にし、検討を重ねていきたいと考えております。

## 保健室つれづれ

保健嘱託員 竹浪　幸子

応急処置では、大きな怪我は少ないのですが、意外と多いのは靴擦れです。素足で靴を履いていたり窮屈なデザインだったり。こうした合わない靴が原因で筋肉痛を起こしている学生もいます。足は立ったり・跳んだりするばかりでなく、歩くたびに血液の循環を促進するポンプの役割もしています。目的に合った靴を選びたいものです。足に限りませんが、時には体をじっくり感じてみることもいいと思います。

怪我が少ない一方で、相談ごとは多く、病院紹介、食事・栄養のこと、学業・進路のこと、対人関係、性に関すること、気分の落ちこみなど様々な悩みを抱えて学生たちは訪れます。

なかでも学外での実習では、社会の厳しさや思いもよらない自身の感情に直面し、戸惑いを持つ学生も少なくないようです。

緊張や辛さの中に、責任感や何とかお役に立ちたい、学びを深めたいという思いが伝わってきます。また、「患者さんに『ありがとう』と言われたんだよ」とあふれる喜びを報告してくれる学生もいます。

保健室には、色々な思いがこもった風船が行き交い、１年から４年へと大きくなりながら、毎春には、それぞれが目指す世界へと飛び立とうとしているかのようです。

保健室では、体と心の健康をサポートしています。また、カウンセラー相談の窓口になっております。

## 第7期生の就職活動状況

就職対策委員会

年々就職内定が早まる中、7期生の就職活動もいよいよ本格化し、4年生は就職活動に真剣に取り組んでいます。本学では、就職対策として就職に対する意識を高めるため、3年次から以下の事業を行なっています。

### 1　就職合同説明会の開催

病院・社会福祉施設の人事担当者と学生（3・4年生）が直接面談して、情報交換する場であり、高い就職率の維持、県内定着率の向上を目指して、7月（前期）と10月（後期）に開催しています。学生は多くの病院・施設の担当者から直接情報を得て、より自分に適合した就職先の開拓の場となっているようです。

### 2　学科別就職ガイダンスの開催

各学科の特性に即した就職指導を行なうため、3年後期と4年前期に学科別に実施しています。3年生は卒業した先輩の就職活動体験報告を聴講させて就職への意識を高めさせ、4年生は就職指導カウンセラーを外部講師として招き、エントリーシートの記入方法や実際の面接指導をしていただきます。又、実践に向けた具体的な就職活動を行うために学科合同で集団面接の仕方の研修会も実施しています。

**【7期生就職内定状況　単位：人】**　H20.12.8現在

| 学科 | 卒業予定者 | 就職希望者 | 就職内定者 |
|---|---|---|---|
| 看護学科 | 115 | 112 | 80 |
| 理学療法学科 | 19 | 17 | 4 |
| 社会福祉学科 | 43 | 42 | 13 |
| 合計 | 177 | 171 | 97 |

## ［大学院科目等履修生募集］のお知らせ

### 科目等履修制度とは

社会人でフルタイムでの学習が難しい方や、興味のある特定の科目だけを勉強したいという方が、パートタイムで大学院の授業科目を履修することができる制度です。

### 単位修得ができます

学習成果について評価を受け、試験に合格すると単位を修得できます。この単位は、青森県立保健大学大学院に進学した際に既修得単位として認定を受ける場合（最大10単位まで）にご利用できます。将来的に大学院進学を考えている方にとりましては、そのための事前準備ともなります。

### 募集時期など

本学においては、通常、前期（4月入学）と後期（10月入学）の年2回募集します。平成21年4月入学生については、平成21年1月中旬から下旬に募集する予定です。募集要項は平成20年1月中旬に配布する予定です。

## 平成21年度入学者選抜試験のお知らせ（学部・大学院）

青森県立保健大学では、以下のとおり平成21年度入学者選抜試験を実施します。詳しくは、募集要項をご覧ください。
<お問い合わせ先> 教務課入試担当 TEL:017-765-2144 FAX:017-765-2188 E-mail:nyushi@auhw.ac.jp

### ●一般選抜前期日程【学部】

| | | | |
|---|---|---|---|
| 募集人員 | 看護学科 …… 47名 | 出願期間 | 平成21年1月26日（月）～2月4日（水） |
| | 理学療法学科 …… 14名 | 試験日 | 平成21年2月25日（水） |
| | 社会福祉学科 …… 25名 | 合格発表 | 平成21年3月6日（金） |
| | 栄養学科 …… 20名 | 入学手続期間 | 平成21年3月6日（金）～3月13日（金） |

### ●一般選抜後期日程【学部】

| | | | |
|---|---|---|---|
| 募集人員 | 看護学科 …… 8名 | 出願期間 | 平成21年1月26日（月）～2月4日（水） |
| | 理学療法学科 …… 3名 | 試験日 | 平成21年3月12日（木） |
| | 社会福祉学科 …… 6名 | 合格発表 | 平成21年3月23日（月） |
| | 栄養学科 …… 4名 | 入学手続期間 | 平成21年3月23日（月）～3月27日（金） |

### ●大学院博士前期課程2次募集

| | | | |
|---|---|---|---|
| 募集人員 | 地域保健福祉学分野<br>理学療法学分野<br>生活健康科学分野<br>看護学分野 } ※10名程度 | 出願資格認定審査申請期間 | 平成21年1月5日（月）～1月9日（金） |
| | | 出願期間 | 平成21年1月19日（月）～1月23日（金） |
| | | 試験日 | 平成21年2月7日（土） |
| | | 合格発表 | 平成21年2月16日（月） |
| | ※社会人特別選抜等を含む。 | 入学手続期間 | 平成21年2月17日（火）～2月24日（火） |

### ●大学院博士後期課程2次募集

| | | | |
|---|---|---|---|
| 募集人員 | 地域保健福祉学分野<br>理学療法学分野<br>生活健康科学分野<br>看護学分野 } ※若干名 | 出願資格認定審査申請期間 | 平成21年1月5日（月）～1月9日（金） |
| | | 出願期間 | 平成21年1月19日（月）～1月23日（金） |
| | | 試験日 | 平成21年2月7日（土） |
| | | 合格発表 | 平成21年2月16日（月） |
| | ※社会人特別選抜等を含む。 | 入学手続期間 | 平成21年2月17日（火）～2月24日（火） |

## 大学見学及び出張講義の状況

学生募集対策委員会

### 〈大学見学〉

本学では、６月に開催するオープンキャンパスや、８月に開催する夏のキャンパス見学会のほかに、高校を始め多くの方々の御希望に応じて、随時、キャンパスを見学していただいています。

本学の快適な教育環境、模擬講義、充実した教員数や設備、本学の学生による生のメッセージなどを通じて、本学の教育研究機関としてのすばらしさを、幅広く理解していただきたいと思っています。

今年度はこれまでに、高校１３校（田名部、百石、むつ工業、木造、大湊、十和田西、青森、青森戸山、岩木、七戸、野辺地、黒石、六戸）、中学校１校（青森市立東）が本学を見学に訪れています。

### 〈出張講義〉

本学では、高校への出張講義を、大学教育への理解を深め、高校生の進路選択の手助けとなる大切な機会だと考えています。

県内の高校はもとより、県外の高校へも希望に応じて講師を派遣し、専門教育の内容を分かりやすく説明する講義を行っています。

今年度はこれまでに、１３の高校（大湊、八戸南、三沢、市立函館、八戸、能代北、弘前、青森戸山、青森東、八戸西、青森南、弘前学院聖愛、八戸工業大学第二）で出張講義を行っています。

見学に訪れた高校生の皆さん

## オフィスアワースタート

学生委員会

本学では、平成 20 年 10 月から、学生が教員に気軽に相談し、助言を受けられるように、オフィスアワーを始めました。

オフィスアワーとは、各教員があらかじめ時間を決めて研究室などに待機し、この時間帯は学生からの相談に応じられるように時間を空けておく制度です。

オフィスアワーでは、授業に関することや、生活に関することなど、大学生活を送る上でのさまざまな問題について相談し、助言を受けることができます。

自分が所属する学科の教員に限らず、他学科の教員に相談することもできます。

各教員が相談に応ずる曜日、時間帯、場所は、半年ごとにお知らせすることにしていますが、多くの教員が週に１回、１時間以上の時間をオフィスアワーに充てています。

予約が必要かどうかは教員によって異なりますので、事前に確認が必要です。

不在により相談を受けられない場合は、掲示板に掲示するとともに、研究室等各教員が相談を受ける場所に掲示し、お知らせしています。

この設定日以外は相談を受けられないということではありません。

ただし、多くの教員は多忙な毎日を送っており、なかなか時間がとれない場合もありますので、相談があるときは、できるだけこのオフィスアワーを利用するように学生に呼びかけています。

この制度が大いに活用され、充実した学生生活を送る手助けとなるようにしていきたいと考えています。

### 編集後記

開学１０年を迎えた今年の本学のキーワードをあげるなら“連携”ではないでしょうか。その中の文部科学省の「戦略的大学連携支援事業」の採択、「十和田市」との連携協定、４年目を迎えた「高大連携」について、本号で紹介いたしました。大学では“学生の教育以外にこんなこともしている”と驚かれたり、“学生のための時間は充分なのだろうか”と心配される方もいらっしゃるのではないでしょうか。今年１０月から新しい試みとして、全教員が「学生の相談の時間」オフィスアワーを設けました。まだまだチューター制度ほど学生に浸透していませんが、気軽に各教員の研究室をノックしてくれればと思っています。

そんな１年のあれこれを満載した“活彩保健大学だより”をご高閲いただきたいと思います。

広報情報委員／坂本祐子（看護学科）

公立大学法人
青森県立保健大学
〒030-8505 青森市浜館字間瀬58-1 TEL017-765-2000(代表)
編集・発行／青森県立保健大学広報記録委員会　大学ホームページ　http://www. auhw. ac. jp/
（バックナンバーもご覧になれます。）